

担当クラスに対して教員が持つイメージと 学習者分析の差異に関する一考察

A Consideration of Differences between Teachers' Perspectives of Classroom Environment
and Learner Analysis

阿部(寺井) 朋子¹⁾²⁾

喜多 敏博³⁾

江川 良裕³⁾

鈴木 克明³⁾

Tomoko ABE(TERAI)

Toshihiro KITA

Yoshihiro EKAWA

Katsuaki SUZUKI

熊本大学大学院教授システム学専攻¹⁾ 武庫川女子大学²⁾ 熊本大学教授システム学研究センター³⁾

Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University¹⁾

Mukogawa Women's University²⁾

Research Center for Instructional Systems, Kumamoto University³⁾

＜要約＞ 本研究では、担当するクラスに対する教員のイメージと学習者分析のアンケート結果を比較し、学習者分析の必要性について考察した。アンケートは大学の 2 クラスで実施され、まず教員が、13 因子のそれぞれに対して、どちらのクラスの得点が高いかまたは同じくらいであるかを予想した。次に、2 クラスのアンケート結果の得点を比較した。その結果、教員の予想とは異なり、ほぼすべての因子において 2 クラスの得点差はみられなかった。今回の結果からは、教員のイメージと学習者分析の両方から授業改善を進める必要があると考えられた。

＜キーワード＞ インストラクショナルデザイン、授業研究、授業分析、授業設計、大学教育

1. 背景と目的

授業改善を行う際は、漠然と改善するのではなく、何をどのように改善するかを明確にする必要があるが、それは容易なことではない。

ディックら(2004)は、教材や授業をデザインする際、学習者についてできるだけ多くを知ることが必要であるとしている。そして、学習者分析に必要な項目として、1. 前提行動、2 教育内容に対する前提知識、3. 教育内容と実現可能な教育伝達システムに対する態度、4. 学習の動機づけ、5. 教育レベルと能力、6. 学習スタイルの好み、7. インストラクションを提供するトレーニング組織に対する態度、8. グループの特徴の 8 つを挙げている。これらの分析には、インタビュー・アンケート・観察などのデータを用いることができるとされているが、本当に学習者分析は必要なのであろうか。

本研究では、アンケート結果を分析し、「教員が持つイメージ(予想)」と「学習者分析の結果」に違いがあるのかどうかを調べることにする。ここでは、同時期・同人数で実施された 2 クラスを比較した。

2. 方法

2019 年度の授業中に実施したアンケート調査

を分析した。

対象者：筆頭著者(以降、教員)が担当している大学共通教育科目「人間関係の心理学」の受講生 100 名(以降、人間クラス)。比較対象として、同時期に開講されていた共通教育科目の心理学系 1 科目 100 名(以降、比較クラス)。

手続き：両科目とも、最終授業時に無記名のアンケート調査を実施した。

項目：Q1 群は浅野(2002)の学習志向に関する 25 項目。Q2 群は大学全体の授業について(11 項目)、Q3 群は当該授業に対する不安(12 項目)、Q4 群は共通教育の授業で人と話をするについて(14 項目)であり、Q2 群～4 群はオリジナルの項目であった。

倫理的配慮：アンケート配布時に無記名の任意調査であることを伝え、参加したくない人は白紙のまま提出して良いこと、成績には一切影響しないことなどを伝えた。また、提出時は回収場所から離れた場所に教員がいることなどを口頭で説明した。アンケートの表紙では「授業改善や個人研究に使ってよいかどうか」を尋ねており、データを使ってよい人はチェックを入れるようにと依頼した。

3. 結果

回収した質問紙数：人間クラス 82 名分、比較

クラス 83 名分を回収した。この中から「使用しないでほしい」にチェックを入れていた 2 名と、どちらにもチェックを入れていなかった 1 名を除外し、人間クラス 81 名分、比較クラス 81 名分の合計 162 名分を分析に使用した。

1)項目内容に関する検討：Q1 群～Q4 群について、群ごとに因子分析を行った。その結果、Q1 群は 5 因子、Q2 群は 4 因子、Q3 群は 2 因子、Q4 群は 2 因子が抽出された。各因子は表 1 のように命名した。

2)各因子に対する教員の予想：次に、各因子の項目内容を確認しながら、人間クラスと比較クラスのどちらの得点が高いか、または同じくらいであるかを予想した。

3)学習者分析の結果との比較：予想を終えた後、それぞれのクラスにおいて因子ごとの平均値を算出し、人間クラスと比較クラスの平均値の差について *t* 検定を用いて比較した。

分析の結果、Q1 群～Q4 群までの全 13 因子において、平均値に差がみられたのは Q2 群の第 1 因子と第 3 因子のみであった。つまり、教員が「差がない」と予想したのは 1 因子(Q1 群の第 5 因子)のみであったが、アンケート結果では、ほぼすべての因子に得点差はみられなかったこととなる。

4. 考察

教員の予想では、人間クラスの方が「自己向上志向」が高く、「講義形式を好み」「私語を苦痛に感じ」、「グループ活動の不安」や「レポートや授業内容の不安」を持っており、「他者理解への意欲」や「実務的情報」が比較クラスよりも高いと捉えられていた。つまり、グループワークが苦手で不安は高いが、熱心に授業に参加しており、学習意欲が高いというイメージであったといえる。

しかし、学習者分析の結果では、ほぼすべての因子において有意差はみられず、対象クラスとの違いは予想以

上に小さかった。特に「Q3 群：不安」「Q4 群：意欲や要望」では、人間クラスが高いことが明確に予想されていたが、実際には差は見られなかった。このため、教員のイメージのみで授業改善を進めていけば、人間クラスに対して過度に「不安を減少させる授業」を行い、低リスクのアクティブラーニング(松田・根本・鈴木, 2017)の試行だけに留まっていた可能性がある。

今回の結果では、有意な差があった項目は 13 因子中 2 因子のみであった。しかし、単に得点だけを比較すると、統計的に有意ではないものの Q2 群～Q4 群はすべて教員の予想通りであった。これが偶然ではないとすると、統計的な差には現れていない微細なイメージの差を教員が捉えられているとも考えられる。現実的にはディックらの 8 項目すべてのデータを収集してから授業改善を行うことは困難であるため、授業改善を行う際は、教員のイメージと学習者分析の両方から授業の改善点を明確にする必要があると思われる。

参考文献

- 浅野志津子(2002). 学習動機が生涯学習参加に及ぼす影響とその過程—放送大学学生と一般大学学生を対象とした調査から— 教育心理学研究, 50, 141-151.
- 松田岳士・根本淳子・鈴木克明編著 (2017). 大学授業改善とインストラクショナルデザイン, ミネルヴァ書房
- ウォルター・ディック、ルー・ケアリー、ジェイムズ・O・ケアリー (2004). はじめてのインストラクショナルデザイン, ピアソン・エデュケーション

表1 各因子に対する教員の予想と学習者分析の結果

			教員の予想 (高いほうに○)		学習者分析の結果 平均値(SD)		
			人間クラス	比較クラス	人間クラス	比較クラス	<i>t</i> 値
Q1群	1 第1因子	交友志向		○	3.67 (0.89)	3.92 (0.76)	<i>ns</i>
	2 第2因子	職業専門志向		○	4.07 (0.79)	3.93 (0.86)	<i>ns</i>
	3 第3因子	自己向上志向	○		4.02 (0.61)	4.07 (0.68)	<i>ns</i>
	4 第4因子	経験関与的課題志向	○		3.18 (0.63)	3.08 (0.64)	<i>ns</i>
	5 第5因子	消極的志向	?	?	2.93 (0.94)	3.13 (0.84)	<i>ns</i>
Q2群	6 第1因子	講義形式への好み	○		3.47 (0.85)	3.18 (0.83)	2.25*
	7 第2因子	授業内容の理解不足		○	3.25 (0.92)	3.46 (0.88)	<i>ns</i>
	8 第3因子	学習への消極的態度		○	2.72 (0.91)	3.03 (1.02)	2.03*
	9 第4因子	私語への苦痛	○		3.77 (2.97)	3.18 (1.06)	<i>ns</i>
Q3群	10 第1因子	グループ活動への不安	○		3.50 (0.96)	3.20 (1.01)	<i>ns</i>
	11 第2因子	レポートや授業内容への不安	○		3.50 (1.15)	3.33 (0.83)	<i>ns</i>
Q4群	12 第1因子	他者理解への意欲	○		4.23 (0.64)	4.11 (0.64)	<i>ns</i>
	13 第2因子	実務的情報への要望	○		3.20 (0.95)	3.18 (0.92)	<i>ns</i>

* *p* < .05